

「アジア主義」と「南方関与」—— 第一次大戦期を中心として

清水 元

(長崎県立大学)

はじめに

わたしの本日のテーマは、「アジア主義」と「南方関与」ということでございます。われわれの研究会は、「南方関与」を多面的に研究するというを目的にしております。この「南方関与」ということばでございますけれども、これは、矢野暢さんの造語でありまして、近代日本と東南アジア地域との関係を表わすことばです。地域間の関係ということになりますと、普通は「交流」とか「関係」とかいうことばを使うのが普通でありましようけれど、なぜ矢野さんは「南方関与」というふうに「関与」ということばを使ったのか。この点が問題です。これは、日本と東南アジアとの関係の歴史というものをみておきますと、「交流」とか「関係」とかいう一種の相互性といえますか、相関性といえますか、お互いに行き来をする、物をやりとりするような相互性というものが欠けている。で、一方的に日本のほうから東南アジアにかかわる、つまり、日本が主体で東南アジアが客体だという歴史があったわけです。おそらくこうした一方的なかかわりを表わすことばとして「関与」ということばを選んだのでしょう。それも矢野さんは政治学者ですから、政治学のコミットメントとかエンゲージメントとかいうものの訳語としての「関与」というものを選んで、このことばを使ったのだらうと付度するわけであります。

このように、近代日本と東南アジア（あるいは太平洋地域を含めますけれど）の関係というものが、日本の側からの一方的な関与ということであると、この関与を正当化しようとする論理とか、イデオロギーというようなものを生みだそうとする衝動を、つねにこの関係は潜ませていた、といわざるをえません。この「南方関与」のイデオロギーというものを、とりあえず歴史的用語であるところの「南進論」とよんでおきます。本日のわたしの課題というのは、この「南方関与」のイデオロギー的な側面としての「南進論」というものに焦点をあわせて、この「南進論」が「アジア主義」という当時のもうひとつの対外思想と、どういう関係にたつのかということについて、やや図式的にお話しをしたいというふうに考えているわけであります。

「南進論」と「アジア主義」

「南進論」というのは、ご承知のとおり、近代日本が国勢を発展させていくべき方向を、東南アジア・太平洋地域という南方海洋地域に求めて、日本のそれらの地域への進出を鼓吹する議論です。そして、日本とそうした地域のあいだには、かかわりの必然性があるという議論を展開したのであります。近代日本史の全般を通してみますと、だいたい3回ほど南進論が沸騰した時期がございます。第1回目は明治の中ごろ、西暦1880年代から90年代にかけてであり、第2回目の時期というの

は明治の末から大正の初期、1910年代のことでございます。第3回目は昭和前期、1930～40年代にかけて、つまり大東亜共栄戦争へ入っていく時期にあたります。

南進論は、中国・朝鮮といったアジア大陸への発展を説く「北進論」と対比されて問題にされることが多いわけですが、北進論にはしばしばアジアの連帯によってアジアを興す、「興亜」というテーマがともなっていました。これをアジア主義的なテーマと考えるわけです。このアジア主義的なテーマと南進論は、いったいどういう関係にたつのかという疑問が当然生じてまいります。この点について、「南方関与」ということばを使った矢野さんが一言してありまして、1979年に出版された『日本の南洋史観』（中公新書）という本では、「南進論とアジア主義は別物であって」、「（南進論は）アジア主義的発想よりも、むしろみごとに当時の欧米の外交思想と噛み合いをみせた」といっております。その前にでた『南進の系譜』（中公新書、1975年）でも、「日本人の南方関与はアジア主義的特質に乏しく、その意味からも日本の朝鮮半島および中国との関わりと東南アジアとの関わりとは本質的に違うのではないか」との問題提起を行なっています。非常に重要な指摘を行なっているわけであります。しかしながら、矢野さんのこの2冊の本では、この非常に重要な指摘があるにもかかわらず、この命題に対する考察というものは、ほとんどなされておられません。そこで、矢野さんのこの命題というものが、当たっているのかどうかというようなことを検証するというのが、きょうのわたしの課題ということになります。

あらかじめ結論を申しあげておきますと、「南進論」と「アジア主義」との関係についての矢野さんの命題というものは、だいたい明治中期の第1期の南進論にはほぼあてはまるというふうを考えられます。しかしながら、その後の南進論は、南進論そのものが第2期に非常に大きな変容をとげた、というふうにはわたしは思っています。それは、きわめてアジア主義的な変容といってもいいものであります。以後、南進論の概念装置というものは、通常「アジア主義」といわれるものとあまり区別できないようなものになって、それがそのまま最終的に昭和期の大東亜共栄圏の概念というもののなかに溶けこんでいく、融解していくというふうには考えられるというのが、わたしの結論なわけであります。そこでこの問題をさきほど図式的というふうに申しましたけれども、やや概念的に考えてみようと思うわけであります。

近代日本の対外思想の磁場

いうまでもなく、「アジア主義」も「南進論」も、近代日本が生みだした対外思想です。そこで、この対外思想を生みだした近代日本史の磁場というようなものを考えてみなくてはなりません。この磁場を構成している基礎的な条件というのは、わたしはつぎの3つの事実だと思えます。第1の事実というのは、そうした対外思想を生みだした時代が、「帝国主義」という国際秩序が世界を支配していた時代だったということであります。そのような時代に、近代日本が西歐的な国家システムに加わった。これが、第2の事実であります。第3番目に、その日本がヨーロッパ起源でない人種の国として唯一の列強になった。この3つの事実が、近代日本史から生れてくる対外思想を規定

する磁場だというふうに思っております。この3つの基礎条件から、この磁場で働いていた「モメント」といいますか、あるいは「ベクトル」とでもいうものを考えてみますと、わたしはひとつは「国際性」のモメント、もうひとつは「膨張性」のモメント、さらに「人種主義」のモメントという3つのモメント、あるいはベクトルというものに括られるというふうに思います。

「国際性」のモメントというのは、いうまでもなく、開国後の日本が近代的な国際社会、つまり、国際法の支配する世界への参加を望んだという第2の条件から生じております。当然、国際社会の一員として認められるためには、そのルールに従わなくてはならないという意味での国際性であります。そのためには、日本は、法・政治・経済・社会全般にわたる近代化、西洋化を行なわなくてはならなかったわけです。したがって、この「国際性」のモメントというのは、いい換えれば「近代化」のモメントといってもいいわけです。このモメントが、この磁場では非常に強力に働いていたというのが第1点であります。

しかしながら、日本がその当時参加を希望していた19世紀後半の国際社会というものは、とりもなおさず植民地支配を是認する欧米中心の帝国主義的な秩序であって、この秩序を形成していた基本的な要素がパワー・ポリティックスだったという第1の条件が、問題を非常に複雑にしたというふうに考えられます。日本は、近代的な国際社会のメンバーになりたいという願望をもっていたわけですが、その願望というのは、国際社会の秩序というのが帝国主義秩序でありますから、必然的に帝国主義秩序とパワー・ポリティックスを容認するという論理を内包しないわけにはいかなかったからです。となりますと、「国際性」のモメントというのは、そのまま「膨張性」のモメントと表裏一体をなす、同じ盾の一面にすぎないということになります。事実、当時の日本人はどのような対外思想をもつにしても、その前提として「人口・経済・軍備の拡大が世界を支配しつつある」という対世界イメージを共通して抱いておりました。この点は忘れてはならない点だろうと思います。つまり、膨張・拡大への傾きというのは、この時代の対外思想が逃れえなかった与件にはかならなかったと考えられます。

第3に、近代日本は、いうまでもなく、ヨーロッパ起源でない人種の国です。そうであったがゆえに、はじめから東洋とかアジアとかいうようなものに特別な意義を見いだそうという人種主義的な要素、これはきわめてやっかいな要素ですが、そういう要素を対外思想のなかに抱えこまなくてはならなかった。つまり、近代日本の対外思想というのは、「国際性」（ないし「近代化」）あるいは「膨張性」、「人種主義」という、その磁場に働く3つの力によって規定されていたということができると思います。

この磁場において圧倒的に優勢だったのは、あくまでも「国際化」（近代化）のモメントであります。植民地化の危機すらあった当時の帝国主義的な国際環境のなかで、日本が独立をまっとうして生きのびていくためには、西欧近代への適応、つまり近代化、西欧化というものは、やむをえざる選択でありました。したがって、「国際化」（近代化）のモメントが、この磁場において非常に優勢であったことは当然であります。

「反動」としての「アジア主義」

しかし、よく考えてみれば、この選択は本質的に矛盾を含んでおります。日本が独立をまっとうして、日本でありつづけるためには、近代化しなくてはならないというわけですが、この近代化は西欧化にはかならないわけですから、日本は近代化すればするほど、日本でなくなっていくという自家撞着に陥らざるをえないからです。つまり、本質的に矛盾を含んだ選択であったわけです。それゆえに当時の対外思想には、近代化の過程で失われていくものに対する哀惜の情、この宿命を押しつけてきた西欧の近代文明というものへの反感という、心性とか心情的なムードというものが少なからず影をおとしていた、というふうにいえると思います。かつて、竹内好さんがアジア主義に下した「アジア主義はある実質内容を備えた、客観的に限定できる思想ではなくて、ひとつの傾向性とも言うべきもの」という有名な定義は、アジア主義の基盤にあるこうした心性を鋭く指摘したものだといえます。わたしは、この傾向性そのものがアジア主義だとは思っておりませんが、アジア主義というものを生み出す基盤になったものとして、この心性に着目することは正しいことだと思っております。少なくとも、アジア主義はこうした心情を基盤として生まれたものです。したがって、圧倒的な力として働いている「近代化」の力（脱亜入欧あるいは欧米協調主義といってもいいわけですが）、これを物理でいう「作用」とか「動」とかいうふうを考えれば、アジア主義はこれに対する「反作用」ないしは「反動」であったといつてもよいように思います。レジュメに書きました「反動」としてのアジア主義というのはそういう意味です。

アジア主義とは「反動」であった。したがって、もともと積極的な思想内容というものをもっていなかったというふうに、わたしはみております。そこでこの「反動」、あるいは「反作用」に、より積極的な思想内容というものを与えるものとして、「人種主義」のモメントというものの方が動員されたと考えることができるのではないかと考えております。アジア主義には、反西欧の心情というものが基層としてあったわけですから、この心情をさらに積極化させて、反西欧的なイデオロギーというものを生み出すということが行なわれたわけでありました。つまり、当時のアジア主義というものをみてみますと、西欧の支配下におかれた当時の国際秩序というものを認めることを潔しとしない。そして「西洋」に対して「東洋」ないしは「アジア」という文化的、地域的、人種的な概念を対峙させた。さらに、西欧列強のパワー・ポリティックスというものに対して、アジア主義においてはことさらに儒教的「徳治」の概念を国際関係へ適応しようとする、モラル・ポリティックスとでもよぶべき傾向が孕まれていたと思うわけです。したがって、定義づけるとすれば、アジア主義というのは、西欧近代文明の原理（これを、アジア主義者はおそらく「力」とか「技術性」というものに象徴される、というふうに考えていたと思いますが）とは違った文明の原理（おそらく「モラル」、「道義性」というものによって象徴されるような原理ですが）としての「アジア」というものを構想し、この「文明の原理としてのアジア」によって西欧の近代文明に抵抗し、この原理のもとにアジア諸国が連帯して西欧の帝国主義に対抗しようとする、こういう思想だというふう

に一応定義づけられるのではないかと思います。

しかし、ここで注意しておかなくてはならないのは、アジア主義の根底にあるのは、じつは西欧の圧倒的な力——政治的にも、軍事的にも、経済的にも、文化的にも、精神的にも——の前に威圧されている、「屈辱的」なアジアという一種の絶望的な現実認識だということです。代表的なアジア主義者である岡倉天心が、『東洋の覚醒』（1903年）のなかで、「アジアは屈辱においてひとつ」というようなことをいっておりますけれども、彼も「屈辱的アジア」という強烈な自覚があって、それが彼の著作におけるアジア主義的主張を生みだしていく根源にあったと思います。したがって、アジア主義というのは、この天心にもみられるように、みかけはきわめて能動的な、あるいは積極的な表現をとっていても、その本質においては西欧の力の圧倒的優勢から、じつはひたすら身を守ろうとする防衛的な性格、あるいは消極的な性格のものであったということは否定できないように思われます。

近代日本の「膨張性」

以上、「国際性」のモメント、「近代化」のモメントに対する「反動」としてアジア主義が発生して、「人種主義」という第3のモメントによってイデオロギー的に強化されたということをお話したわけですが、第2の「膨張性」のモメントについても一言しておきます。これは、さきほど帝国主義の時代にあっては、拡大・膨張への傾きというものは、逃れえない与件であったというふうに申しあげましたけれども、こうした「膨張性」のモメントというのは、日本の幕末ぐらいにすでにでてきております。これは開国を迫る西欧列強に対する反動としてでてきているわけですが、「進取経略論」とか「航海遠略論」とかいわれる議論です。これは、たとえば、本多利明だとか佐藤信淵とか吉田松陰もそうですし、橋本左内とか堀田正睦とかいろいろな人がおりますけれども、いわゆる攘夷のために開国する、つまり開国か攘夷かという対立のなかで、攘夷のための開国論というものがあったのですが、その根柢をなしているような議論であります。つまり、アジアに勢力を拡張しつつある西欧諸国に対抗して、日本の独立を確保するには、日本もアジアへ膨張して大国になることによって、西欧列強とのあいだにバランス・オブ・パワーをつくりださなくてはならない、という主張であります。その意味では、それは一種のパワー・ポリティクスだといえるのですけれども、こういう議論が、開国し大国になり最後にいつか攘夷をするという、「攘夷のための開国」論の根柢になっており、この議論が明治期のアジア主義者の議論のなかには、非常に濃厚に受け継がれております。たとえば、アジア主義者で有名な樽井藤吉の『大東亜合邦論』や、菅沼貞風という平戸が生んだアジア主義的な南進論者の議論というものは、この幕末の進取経略論、航海遠略論の系譜を引く議論だったということも、注目しておく必要があろうかと思います。

「脱亜」と「興亜」

以上、脱亜入欧主義という「動」に対する「反動」としてアジア主義が成立したということを手

しあげたわけですが、この「脱亜主義」と「アジア主義」というものを、二項対立的に考えて、近代日本の対外思想というものを論ずるということが、これまで比較的多かったわけであります。最初に、「脱亜」と「興亜」、「アジア主義」というものを、二項対立的に取りあげた論者は、やはり竹内好さんです。竹内さんの解釈によりますと、「脱亜」というのは支配の原理、帝国主義の現実を示すシンボルである。「興亜」というのは、連帯の原理と平等主義の理想を示すシンボルであるというふうに考えます。そして、近代日本の歴史というのは、「脱亜」が「興亜」を吸収して、「興亜」を形骸化して利用していったという歴史である。その究極点に大東亜戦争がある、と図式的に言えばこういう解釈であります。

竹内さんは、「脱亜」、「興亜」の原型を、奇しくも明治18年（1885年）と同じ年に執筆されました、福沢諭吉の「脱亜論」と樽井藤吉の「大東合邦論」というものに求めております。この議論はなかなかきれいな図式でありまして、わかりやすいわけですが、この二項対立図式によりますと、樽井の議論というのは非常に高く評価されている。いっぽう、福沢の「脱亜論」というのは非常に低く評価されている、というふうになっています。きょうは、この「大東合邦論」、「脱亜論」ということについてお話す時間はありませんので端折りますが、両方をよく読んでみますと、そういう解釈はなかなか成り立ちがたいというのが、わたしの解釈です。けれども、その点については、きょうは触れません。ただ、樽井の「大東合邦論」も、竹内さんの評価するほど非侵略主義的な平等主義の理想を追求したものではない。むしろ、非常に日本中心的なエスノセントリズムの色彩が濃い点がある、ということをおひとつ指摘しておきたい。それから福沢の「脱亜論」も、それが書かれた1880年代の国際情勢というもののコンテクストからみれば、むしろ「脱亜論」というのは、福沢がそれまで唱えていた東洋盟主論型の「朝鮮改造論」・「朝鮮進出論」というものからの撤退宣言であって、けっして「アジア侵略論」の出発点ではないと考えられます。そういう解釈にたつと、従来の通説的な「脱亜」・「興亜」二項対立図式というものにも、若干修正を迫られるのではないかとこのように、わたしは考えているということを申しあげておきたいと思います。とくに、近代日本の対外思想を考える場合には、樽井藤吉にも福沢諭吉にも、ともにみられた東洋盟主論型の対外論というものを、クローズアップするような枠組みというものを考えてみる必要があると考えます。

近代日本の対外思想の座標軸

そこで、ふたたび近代日本史の磁場にもどります。さきほど「国際性」（「近代化」）、「膨張性」、「人種主義」という3つのモメントのことを申しあげましたけれども、第2の「膨張性」のモメントというのは、さらに追求していくと、「国際性」（「近代化」）のモメントの系の中にある帝国主義という要素が基本的には非常に大きいわけですが、もうひとつは「人種主義」のモメントの系の中にある「攘夷のための開国論」の要素からも発しているわけです。したがって、「膨張性」のモメントというのは、最終的には「国際性」（「近代化」）のモメントと、「人種主義」のモメントと

いうふたつのモメントに還元してしまふことができます。とすれば、「脱亜」,「アジア主義」いずれを問わず、近代日本の対外思想というのは、「国際性」(「近代化」)と「人種主義」というふたつのベクトルによって規定されているといつてよいこととなります。ごく単純化したモデル的にいえば、そういうことだと思ひます。

となれば、このふたつのベクトルを縦横両軸とする四象限図式というものを書いてみると、それによつて近代日本の対外思想のあり方を示すことができるのではないか、その試みが第1図です。これは、西洋・東洋の対立軸を縦軸とし、近代化・伝統文化というものの対立軸を横軸にとつております。縦軸を構成する要素といひますか、パラメーターといひるのは、おそらく人種とか文化とか宗教とか地理的な近接性とかいひうものでしょう。こういう要素によつて、縦軸が構成をされている。横軸は近代化、西洋化の程度、つまり力とか技術の達成度が横軸のパラメーターです。当時の人の概念のなかでは、近代化の本質は力と技術性だと考えられていました。

これに対して、伝統文化の本質はモラル(道義性)であるといふふうにならざるを得ないと思ひます。こういう四象限座標といひうものをつくつてみますと、理念型としての「脱亜主義」およびアジア連帯主義は、それぞれ第1象限と第3象限で表わされます。このディメンションにおいては、「脱亜主義」は、人種・文化的な概念としての西洋・東洋対立軸を放棄して、西洋文明を一元的に採用して、ひたすらに近代化を目指すといひうイデオロギーであつて、西洋に与するといひうような政策論として整合性をもつております。

いっぽう、「興亜」の議論も近代化の方向を拒否して、「同文同種」の概念によつてアジアの道義ある連合を果たして、西洋の圧力に対抗しようとする対外イデオロギーといひう意味で、モデル上の整合性を有しております。しかし、樽井藤吉、福沢諭吉にしても、竹内さんがいひうようにすっきりと(イディアルタイプスとして)解釈できないとすると、図表のなかで彼らの議論といひうのは、もう少し第4象限よりのところに実際はあつたといひうえでしょう。そして、その他の対外思想も、皆だいたい第4象限よりのところのどこかにドットされるといひうのが、日本の対外思想の実態であつたといひうふうにならざるを得ないと思ひます。おそらく、「脱亜論」以後の福沢諭吉であつたり、大正期の石橋湛山であつたり、昭和期の津田左右吉であつたりといひうような人たちが、イディアルタイプスとしての「脱亜」といひうディメンションに比較的近いところにいたであらうと思ひますけれども、いずれにしても日本の対外思想の多くは、純粹「脱亜」あるいは純粹「興亜」といひうようなディメンションにはなかつた。興亜に近かつたり、脱亜に近かつたりといひうことはあるにしても、実際には第4象限に表わされているといひうようなディメンションのどこかにドットされるといひうような議論が大半であつたといひうふうにならざるを得ないと思ひます。つまり、それを東洋盟主論型のイデオロギーと申しあげておくわけですが、この議論といひうものは、アジアのなかで近代化がもっとも進んでいる日本がリーダーとなつて、アジアの近代化、アジアの解放を進めるべきだといひう議論であります。

この議論は、第1図に示されているように、方向性を異にするふたつのベクトル、つまり、近代化とアジア(東洋)といひう相矛盾する構成要素によつて規定されております。したがつて、この東

洋盟主論型のイデオロギーというものは、相矛盾するベクトルの二重規定性を受けつつも、その矛盾を整合させようと試みた、近代日本に特異な対外イデオロギーだったと理解することができます。大東亜共栄圏にいたる、その後の近代日本史の歩みをもみても、対外思想の多くは皆、このディメンションに収斂をしていく過程だったというふうを考えられます。「アジア連帯主義」も「脱亜主義」的欧米協調論も、ともにその例外ではありません。「アジア連帯論」は「東洋盟主論」を媒介として「大アジア主義」へ変容いたしますし、後者の脱亜的な帝国主義の議論というのも、日本の帝国主義は西洋とは異なる道義性をもつというような議論に巡回していったからです。いずれにしても近代日本の対外思想は、第4象限の東洋盟主論型のイデオロギーに収斂をしていったのです。それゆえに、このディメンションというものがきわめて重要だということを、大枠としては申しあげておきたいと思います。

明治期「南進論」

こうした座標軸を設定いたしますと、きょうのテーマであります「南進論」というものは、どこに位置づけられるのかということが問題になるわけです。たしかに、明治の中期ごろにでた第1期の「南進論」というものをみておきますと、矢野さんがいうようにアジア主義的な傾向というのは、比較的希薄だったというふうにいわざるをえません。もちろん、南進論というのは多種多様でありまして、とくに明治時代のものは、すぐれて個性的なものが多かったわけでありますから、いちがいに全部そうだといいきってしまうこともできません。たとえば、さきほど挙げました菅沼貞風というような南進論者には、きわめてアジア主義的な傾向が認められます。しかし、この菅沼を例外としますと、おおむね当時の南進論の主流をなした人たちの議論（人脈でいえば、福沢諭吉の門下、あるいは改進黨系の人びと、あるいは榎本武揚につながる人たち、さらには政教社の人たち）には、アジア主義的な傾向は比較的少なかった。むしろ、欧米協調主義的な傾向というもののほうが強かったように思われます。この点で、矢野さんの指摘というのは、少なくとも明治期にかんするかぎりには、かなりあたっているといえます。

明治期の南進論の特徴というのは、朝鮮、中国との連帯を重視するようなアジア主義的な対外思想との対抗関係を強く意識していたところにあるといえます。明治期の南進論者はアジアというよりも、むしろよりグローバルな観点から日本の進むべき道、ビジョンというものを考えていたように思われます。つまり、彼らは基本的には自由貿易に基礎をおいた「通商国家」として、あるいは「海洋国家」として日本が発展していくべきだ、という長期的なビジョンの基に議論を展開しているわけです。しかも、アジア太平洋地域における欧米列強の既得権益に抵触せぬようにとの配慮さえみられます。したがって、この時期の「南進論」というのは、あくまでも平和的、経済的な手段による発展を強調する傾向が強かったのです。

当時の南進論者の多くにみられた平和的、経済的発展の議論というものは、服部徹の『南洋策』（1891年）という本をみますと、もっとも端的に示されております。服部は拓地植民策というもの

を「新地発見策」,「侵食略奪策」,「通商貿易策」の3つに分けておりました,第3の「通商貿易策」を「一名平和策」とよんでいます。そして,自分が提唱する拓地植民策というのは,この平和策としての通商貿易策だといっております。その際,日本が考慮しなくてはならない地域というものにもふれておりました,それはアジアではなくて,今日の環太平洋地域こそが日本にとって第一義的に発展していくべき地域だといっております。しかし,彼の主張はけっしてこの環太平洋地域だけに特定されたリージョナリズムを志向するものではありませんでした。つづけてこの『南洋策』のなかで,通商貿易には範囲や境界はなく,相互に利益のあるかぎりは,地球上のすべての地域へ,日本は通商交易関係を結んで発展していくべきだといっています。つまり,日本の通商活動は,非常に普遍かつグローバルな繋りのなかで取りあげられていることが特徴であります。こういう認識に支えられていたがゆえに,服部は「通商貿易策」という第3の拓地植民策は平和策だというわけです。つまり,「通商貿易策」というのは武力的手段によらないというだけではなくて,その関係のなかに組みこまれる当事国相互の利益をもたらす,だから国際平和が生れるのだ,という認識です。これは,いうまでもなく,古典派経済学的なアダム・スミス流の予定調和論の世界です。こういう議論を,当時の南進論者は基本にしていたということでもあります。

明治期「南洋」の地理認識

というと,非常に突飛に聞こえるかもしれませんが,これはけっして不思議なことではありません。自由貿易を主張するような西洋の自由主義経済学というものが日本に紹介されたのは,幕末維新期です。ですから,明治中期にこういう議論が日本人の基礎にあったということは,ぜんぜん不思議ではありません。しかも,南進論者には,洋学に親しむ知識人が多かったことを考えますと,こうした古典派経済学もどきの楽観主義というものがあったことも,そう不思議なことではないのです。そして,何にもまして重要なことは,明治期の南進論者にとっては,日本が発展していくべき地域である「南洋」というのは,アジアとは別の地域としての太平洋地域だったということです。

当時の南進論者のひとりである志賀重昂の『南洋時事』(1887年)でも,大洋州を中心とした地域が「南洋」というふうに考えられています。志賀は,この本のなかで,「南洋」というのを発見したのは自分だ,そういう地域概念を日本人にはじめて提起したのは自分だと自画自賛しております。しかし,もちろん志賀が南洋を発見したわけでも,この地域概念をつくりだしたわけでもない。当時の西洋で考えられていた「南洋」という概念が,志賀のいっている「南洋」概念にほかなりません。当時の西洋における「南洋」の概念というのは,西洋,東洋とも違う太平洋地域,ないしは太平洋の南,大洋州あたりを指しております。この概念は,当時の地理学のなかではひとつの流れとしてあった。地理学者であった志賀は,もちろんそのことを知っていたわけです。この事実からも,当時の南進論者のアジア主義的な傾向の希薄さと,欧米流の対外思想との親縁性というものも,推測できるわけです。明治期南進論の南進の対象地域というのは,必ずしも現在の東南アジアを中

心とするものではありません。東南アジアのなかでも、島嶼部東南アジアというのはそうすけれども、そのあたりから大洋州方面へ広がる海域がその対象でありました。そもそも当時の日本人は、現在の東南アジアをひとつの地域として認識しておりません。そのことは、当時の地理啓蒙書でベストセラーになった福沢諭吉の『世界国盡』（1869年）をみればよくわかります。現在の大陸部東南アジアをアジア州に属するものとし、いっぽう、島嶼部東南アジアを大洋州の一部として描き出すというのが、『世界国盡』の記述のしかたです。しかも、アジア州は最初の巻で取りあげられておりますし、大洋州は最後の巻で扱われておりますから、大陸部東南アジアと島嶼部東南アジアとは、まったく別べつの地域というふうに考えられていたことがわかります。こうした地理認識を当時の南進論者はもっていた。そして、アジアではない太平洋地域を、主たる日本の活躍の場と考えていたのだと思います。こうした南進論が変容する契機になったのが、第一次大戦であるというふうに、わたしは考えております。

大正期「南進論」

しかしながら、その前に、この直前の大正政変時の「南進・北進」論争というものにふれておく必要があります。この論争のなかで、徳富蘇峰が果たした役割というものが、第一次大戦期における南進論の変容に大きく影響しているからであります。

大正政変は1910年代のはじめですけれども、この1910年代初期の日本というものは、ひとことでは、経済・財政上の課題と国防上の課題とが矛盾する。いってみれば、二律背反の課題というものがかかえていた。つまり、経済、財政を再建するということがひとつの課題であったと同時に、いっぽうでは、海軍・陸軍ともに国庫に負担を強いるような軍備の増強という要求をつきつけていた。つまり、国防上の課題と経済、財政上の課題というものが矛盾をするというディレンマの状況だったわけです。したがって、そのディレンマのなかで日本の行く末というものを考えなくてはならないということですから、南進にしても北進にしても、このディレンマを非常に強く意識して議論せざるをえなかったのです。

この葛藤のなかで、陸軍が2個師団の増設要求をして、この問題をめぐって大正の政変が起こるわけですが、この時期に南進と北進の論争はひとつのピークを迎えます。これが、南進論の第2のピークであります。この時の南進・北進論争というものは、当時のオピニオンリーダー誌『太陽』の臨時増刊号（1913年11月）で展開されます。ひとことでは、南進論者は財政の逼迫と不調な経済状態というものを非常に重視して、陸軍の2個師団増設に反対をする。これまで以上の北進はやってはならないという立場から、日本の当面の目標を財政の整理と経済発展において、そのための最良の方途を南洋への発展に求めるというふうに議論を展開しました。したがって、この時期の南進論というのは、少なくとも、自由貿易と太平洋への平和的・経済的発展を主張した、明治中期の南進論の多くと軌を一にしていたといつてよいわけです。

しかし、そこで蘇峰がどういう役割を果たしたかと申しますと、彼はこの時期に『時務一家言』

(1913年)と『大正の青年と帝国の前途』(1916年)という2冊の本を書いております。彼は、『時務一家言』では、南進論を否定するような議論をしているわけですが、全面的に南進論を否定するのではなく、北進論の補助イデオロギーとして南進論を使っております。つまり、日本の対外政策の大前提が強国主義、膨張主義である以上、日本は南北どちらへでも進出すべきであり、南進か北進かという対立自体が無意味だ、と主張しているのです。いってみれば、「南北併進論」とでもいえるべき提案です。このことは、のちの南進論の変容にとって非常に重要なひとつのファクターになります。もうひとつのファクターは、『大正の青年と帝国の前途』のなかで蘇峰が提示した「道義的帝国主義」という概念です。この概念は、アジアのことはアジア人によって処理すべきだというアジア・モンロー主義の遂行を使命とする日本の帝国主義を意味しました。こうした一種の人種・民族自決主義の名分を日本の帝国主義に求めたわけであります。そうした名分があるかぎり、日本の膨張主義、帝国主義は道義性を獲得する、と蘇峰は主張したのです。

この道義的帝国主義は、脱亜主義の発展形態である帝国主義のなかに、アジア主義的な要素を「道義」ということばで取りこむという操作によって作られた概念です。さきほどの座標軸からいえば、東洋盟主論の1910年代型のニューバージョンだといえるかもしれません。こうした蘇峰の議論は、のちの第一次大戦期における南進論者の多くに決定的な影響をあたえます。第一次大戦時に現われた「南進論」の多くは、ほとんど例外なく蘇峰が提示した、このふたつの概念というものを、そっくりそのまま受け継ぐというかたちで、議論が展開されているという点で、とくに注目に値します。

第一次大戦期の「南進論」

いよいよ第一次大戦ですけれども、司会の方から「もう時間だ」とのメモがまわってまいりました。ごく端折ってお話しします。第一次大戦が南進論に大きな影響を与えた契機というのは、日本商品の東南アジア進出であるとか、独領南洋群島の領有であるとか、好況と財政の改善とか、いろいろあります。とくに、第1表が示すとおり、開戦前と開戦後で、いかに経済状態あるいは財政状態というものがよくなったかということがわかります。その結果、従来南進論を縛っていた経済・財政上の制約条件が、大幅に緩和されることになりました。こうした諸々の要因が、南進論に大きな影響を与えたのです。当時の日本には、重化学工業化という経済的な大目標があったわけですが、そのための市場と原料資源供給地というものを求めて、東南アジアというものに焦点をあわせて、そこに発展しようという構想が第一次大戦期に顕著に現われてまいります。

当時の日本というのは、日露戦争に勝って世界の一等国の仲間入りをしたという意識がありましたが、実際にはそれに値するかどうかということについて、非常に不安をもっていたというのが実情です。そうした不安をむしろ積極的な願望のかたちで述べる、しかも欧米との対抗をきわめて強く意識して、日本の南進の必然性、正当性を強く主張したわけです。そのもっとも重要な点は、東南アジアに目を向けたということと非常に深くかかわっておりますけれども、南洋の地域概念が変

化していく、つまり南洋の地域の定義づけが変わっていったということです。その変化は、南洋がアジアへ包摂されるというかたちで起こります。南洋は、大洋州ではなくて、アジアに含まれると観念されるようになるのです。第一次大戦直後の1919年に改訂された第3期国定地理教科書をみますと、従来大洋州に分類されていた南洋は、アジア州に所属させられております。しかも「東南アジア」とよばれております。これは日本ではじめてのことでもありますけれども、当時アジアは日本の勢力範囲だという観念が一般的でありましたから、それまでは大洋州に含まれていた南洋がアジアの一部をなすということになれば、南洋もまた日本帝国の勢力範囲だというふうにみる傾向が生まれても、少しも不思議ではありません。

当時の南進論者のなかに神保文治という人がいますが、彼のようにマレー半島以東の地域全体を日本の発展すべき勢力圏だ、と断言してはばからない者さえ現われるほどでありました。そういうふうには第一次大戦というものを契機にして、南洋の地域概念が変化し、アジアとして観念され、アジアは日本の勢力範囲だから、南洋も日本の勢力圏だという議論が支配的になっていったのです。この南洋に対して、日本は適切な援助指導をして、この未開状態を開発すべきだ、それが東洋の盟主としての日本の天職である、といった東洋盟主論型のイデオロギーが、非常に色濃く南進論のなかに付着してくるのは、まさにこの時期であります。副島八十六の『帝国南進策』などという著作は、その典型的なものですけれども、当時の南進論には、のちの八紘一宇につながるような皇道主義的な哲学というものさえが動員されてまいります。

このように、第一次大戦のころに現われた南進論は、膨張主義・アジア主義的な傾向を強め、そして人種主義的な要素を背景に日本の南進の正義、道義性を声高に唱えるということになります。その意味で、1930年代から大東亜戦争期にかけて噴出してきた昭和期の南進論の概念装置は、すべてこの第一次大戦期の南進論が用意したといっても過言ではないと思います。したがって、最初に申しあげた矢野さんの命題というのは、明治期についてはあてはまるけれども、その後の南進論についてはあてはまらない。むしろ、南進論そのものも第一次大戦を契機としてアジア主義的なものに変容したのだ、ということがわたしのきょうの課題に対する答えであります。

レジュメと資料

「アジア主義」と「南方関与」——第一次大戦期を中心に

清水 元

(16 Sept. '95)

I. 課題

- ①「日本人の南方関与は、『アジア主義』的特質に乏しく、その意味もからも、日本の朝鮮半島および中国との関わりと、東南アジアの関わりとは本質的に違うのではないか。」(矢野暢『南進の系譜』中公新書、1975年、「まえがき」iii頁.)
- ②「南進論とアジア主義は別物であって」、「(南進論は) アジア主義的発想よりも、むしろみごとに当時の欧米の外交思想と噛み合いをみせた。」(矢野暢『日本の南洋史観』中公新書、1979年、61、71頁.)

II. 近代日本史の磁場：「国際性（近代化）」・「膨張性」・「人種主義」

基礎条件：①帝国主義という国際秩序が世界を支配していた時代に、②近代日本が西欧的国家システムへ最後に加わり、③ヨーロッパ起源でない人種の国として唯一の列強になった。

III. 「反動」としての「アジア主義」

1. 定義：西欧近代文明の原理（＝力）とは異なる文明の原理（＝モラル）としての「アジア」を構想し、これによって西欧の近代文明に抵抗し、この原理の下にアジア諸国が連帯して西欧の帝国主義に対抗しようとした思想。
2. 屈辱のアジア→「アジア主義」の防衛性、消極性
3. 進取経略論・航海遠略論の系譜

IV. 近代日本の対外思想の座標軸（第1図）

V. 明治期南進論の特徴：自由貿易主義＋海洋国家論

1. 服部徹：拓地殖民策＝①「新地発見策」、②「侵食略奪策」、③「通商貿易策」（「一名平和策」）→「第三策ニ至リテハ最モ平和ノ今日ニ適セル良策ニシテ、居士ガ主唱スル所ノ拓地殖民ノ政略ハ実ニ此ニ在ルナリ。」(服部徹『南洋策——一名南洋貿易及殖民——』村山源馬刊、1891年、80頁.)
2. 「南進論」の地理認識

「南洋トハ何ゾヤ。未ダ世人ガ毫モ注意ヲ措カザル箇処ナリ。然レバ予輩ハ南洋ナル二字ヲ

始メテ諸君ガ面前ニ拉出シ、是レガ注意ヲ惹起セントスルモノナリ。南洋ナル新物体ト新話頭トヲ初メテ捉ヘ来リシ面目ヲ自得スルモノナリ。」(志賀重昂『南洋時事』、「自跋」、『全集』第3巻, 105頁.)

VI. 第一次大戦と南進論のアジア主義的変容

1. 大正政変時の「南進・北進」論争：経済と国防のディレンマ

『太陽』「南進乎北進乎」臨時増刊号(1913年11月)

2. 「南北併進」論と「道義的帝国主義」：イデオログとしての徳富蘇峰

「今日に於て、南と云ひ、北と云ひ、区々の争いを事とするか如きは、其の規模余りに小なるに自から恥ぢざるか。是吾人か南進論者たると與に北進論者たる所以也。」(徳富蘇峰『時務一家言』民友社, 1913年, 300頁.)

「吾人は日本帝国の使命は、完全に亜細亜モンロー主義を遂行するにありと信ずる也。・・・白閥を打破し、黄種を興起し、東西洋に於る人種的、民族的の不平等を救治し、其の均衡を恢復せしむるは、実に我が日本帝国の使命にして、大和民族の天職なりと信ずる也。」(徳富蘇峰『大正の青年と帝国の前途』民友社, 1916年, 594頁.)

「亜細亜と云ふも、日本国民以外には差寄り此の任務に膺るべき資格なしとせば、亜細亜モンロー主義は、即ち日本人によりて亜細亜を処理するの主義也。」(同上書, 374頁.)

3. 第一次大戦と南進論

①第一次大戦の南進論への影響：日本商品の東南アジア進出+旧独領南洋群島の領有+好況と財政の改善(第1表)+海軍南進論人脈の形成

②「南洋」のアジアへの包摂

第三期国定地理教科書(1919年2月改訂発行『尋常小学地理書』巻二)

神保文治『踏査研究 南洋の宝庫』実業之日本社, 1915年

4. 南進論のアジア主義的変容

①国家・国民的「南進」

②国是の物神化と膨張主義

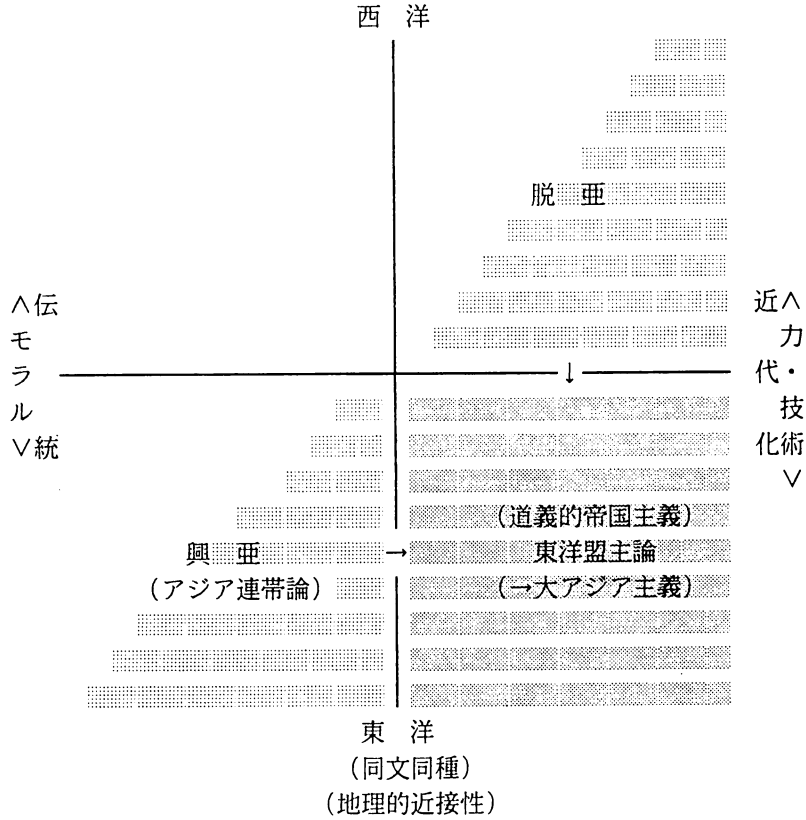
「六合を兼ね八紘を掩ふの詔勅は、今猶ほ炳として日月の如く、日本人の向ふべき所は、豈但だ満蒙のみならんや、豈但だ南洋のみならんや。・・・夫れ我々の祖先の思想は天地(アマツチ)に在り、決して日本、朝鮮、満蒙、南洋とかに局限せず、其の又神の名を天之御中主と呼ぶは天は地を蓋ふの義、中は中央にてCentreの義、主は主宰にてSovereigntyの義にして、共に宇宙の併合を思想とせるなり。」(中井錦城『南洋談』糖業研究会出版部, 1914年, 244~246頁.)

③「東洋盟主論」型イデオロギーへの変貌

「吾人は切に我が国民の実力的なる膨張と発展とを希望し、併せて他の東洋諸国民を誘掖扶

導して其の覚醒を促し終に相共に提携して将来の新文明に貢献するの大理想を抱懐する所以なり。」(副島八十六『帝国南進策』民友社, 1916年, 39頁.)

第1図：近代日本の対外思想の座標軸



第1表 明治末～大正初期の生産、国際収支、財政状況

(単位 百万円)

	1. 生産		2. 国際収支				3. 財政		
	製造工業生産額 (当年価格)		經常取引			在外正 貨増減	歳入 決算額	歳出 決算額	収支
			受	払	収支				
1911 (明治44)	2,263	656	760	△104	△106	657	585	72	
1912 (大正1)	2,484	768	876	△108	△17	687	594	93	
1913 (〃2)	2,720	890	986	△96	32	722	574	148	
1914 (〃3)	2,553	841	851	△10	△34	735	648	87	
1915 (〃4)	2,880	1,044	813	231	167	709	583	126	
1916 (〃5)	4,279	1,703	1,068	635	108	813	591	222	
1917 (〃6)	6,359	2,420	1,446	974	157	1,085	735	350	
1918 (〃7)	8,873	3,093	2,242	851	492	1,479	1,017	462	
1919 (〃8)	11,159	3,335	2,938	397	208	1,809	1,172	637	
1920 (〃9)	9,579	3,094	3,137	△43	△281	2,001	1,360	641	

出所：1. 生産：篠原三代平『長期経済統計10, 鉄鋼業』(東洋経済新報社, 1972), pp142-3.
 2. 国際収支：山沢逸平, 山本有造『〃14, 貿易の国際収支』(〃, 1979), pp224-5より作成.
 3. 財政：江見康一, 塩野谷祐一『〃7, 財政支出』(〃, 1966), pp147-8より作成.